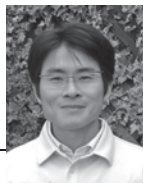
雨水が育む、希望の心
～せっけん運動から雨水の活用へ～



村上　悟
Satoru MURAKAMI
NPO 碧いびわ湖　代表理事

1. はじめに

「わぁ！全然、泡立ちが違う！」

「雨水は濁らずに、透き通ってる！」

二本のペットボトルを見比べて、大人も子どもも、驚きの声をあげています。

場所は滋賀県草津市、住宅地の一角にある綾牧生さん・亨さんのお宅。碧いびわ湖主催の「オープンハウス」開催中の一コマです。

二本のペットボトルにはそれぞれ、雨水と水道水が入れてあり、それぞれに同量のせっけんを入れて泡立て、違いを見比べます。天然の軟水である雨水は、泡立ちもよく、白く濁ることもなく、壁面にせっけんかすが残ることもない…。雨水の「良さ」が、実感として伝わります。

写真-1　雨水と水道水の泡立ち比べ

私たちNPO 碧いびわ湖は、琵琶湖のせっけん運動を原点に「子どもと湖が笑ってる未来へ」を合い言葉にして、命あふれる琵琶湖を取り戻すことを願い、安心が実感できる暮らしをつくり、育むことに取り組んでいる市民事業体です。

1989 年に前身団体の滋賀県環境生活協同組合（環境生協）が設立されて以来、26 年にわたって事業を継続してきました。会員は約150 人（2015 年3 月現在）で、3 人の常勤スタッフを雇用しています。

「買いもの」「住まい」「地域コミュニティ」の3 つを主たる事業領域とし、交流会や学習会などでの会員同士の共感と対話の中から、事業を興してきました。

現在は、共同購入、リサイクル、住まいづくり、地域づくりなどの事業を担い、800 を超える個人・法人のみなさんに利用していただくことで、活動と事業を続けています。

2.「消費者」から「生活者」へ

私たちの事業のはじまりは、リサイクルせっけん運動です。1977 年に赤潮が発生し、琵琶湖の水は赤錆色に染まり、異臭を放ちました。その原因が合成洗剤によるものだと知った人々が、合成洗剤の使用をやめ、せっけんに切り替えることに取り組んだのが、いわゆる「せっけん運動」でした。

当時、その運動の一翼を担っていた湖南消費生活協同組合（湖南生協）では、その取り組みをさらに一歩進めて、廃食用油をせっけんの原料にすることにチャレンジしました。

これにより、合成洗剤と並んで水質汚濁の大きな要因となっていた廃食用油を、排水口から流さず回収できるようになりました。また、せっけんの原料を地域で自給できるようになりました。

この時に始まった廃食用油の回収とリサイクルせっけんの共同購入は、今も脈々と続いています。

「消費者」として、「買う」「選ぶ」「使う」だ

けにとどまらず、「生産」と「供給」の一翼を担うことで「生活者」としての全体性を取り戻そうとする精神が、昔も今も変わらず、私たちの事業を貫いています。

写真-2　廃食用油の回収とせっけんの供給

3. 自立循環型の住まいづくりへ

住まいづくりに関する事業は、合併処理浄化槽の設置運動から始まりました。

せっけん運動を経てもなお、1983 年には琵琶湖で大規模なアオコが発生。上水道の整備が進み水の使用量が増えたことにより、家庭雑排水の汚濁負荷が高まっていました。

当時は高度経済成長期で、京阪神での水需要が急増していました。国策で進められた「琵琶湖総合開発」では、「近畿の水がめ」としての琵琶湖の利水機能を高めるとともに、「流域下水道」の整備によって汚濁負荷を下げる政策がとられました。

しかし、巨大なインフラに依存した暮らしは、私たちをさらに「消費者」化させ、自分たちが流す水への関心を失わせてしまう。また、大地震が来たら壊滅的な被害が生じる。こうした危機感から、湖南生協では「水の自主管理」を掲げ、家庭や地域での合併処理浄化槽の設置を促進するための条例制定運動を展開しました。そして同生協の運動の中から設立された環境生協では、浄化能力の高い「石井式合併浄化槽」の設置事業を行いました。

さらに、世界的な水資源の枯渇や地球温暖化が明らかになる中で、「雨水利用」「太陽熱利用」「太陽光発電」「薪利用」にも注目して、身近な水資源とエネルギーを最大限に活かした「自立循環型の住まいづくり」に取り組むようになりました。

その契機になったのが、1997 年に近江八幡市内で行われた、自立循環型のモデル的な住まいづくりに関わったことでした。

施主は、耐震工学の専門家である鈴木有（たもつ）さん。鈴木さんは1995 年に起きた阪神大震災で、日本古来の伝統構法が持つ優れた耐震性能に気づかれ、ライフラインが自立できる必要性を強く感じられました。その経験を基に行われたご自宅の増改築は「耐震」「自立」「健康」「環境」の視点に基づいて計画され、実施されました。その結果、伝統木造軸組工法による施工、16ｔの地下雨水貯留槽と水質浄化システム、高性能の合併処理浄化槽、真空ガラス管式太陽熱温水器、太陽光発電パネル、薪利用の風呂を擁したものとなりました。

生活用水のほぼすべてを雨水でまかない、合併処理浄化槽で処理された水も再利用（トイレの流し水や雑用水として）できる自立循環型の住まいが完成しました。

写真-3　鈴木家の増改築工事

4. 雨水洗濯の良さに目覚めて

それから13 年を経た2010 年、碧いびわ湖の総会に併せて開催したフォーラムで、鈴木さんから、この住まいでの暮らしについて伺いました。

鈴木さんは「わが家は雨水貯留槽の掃除や機器のメンテナンスが必要だったり、抗生物質を飲むと浄化槽の微生物に害を与えてトイレの流

し水が濁ってしまったりと、手間暇がかかる。けれどもその作業が家族や友人との助け合いを生み出している。また、自分たちが自然と向き合い、健康を心がけるようになっている」と話されました。

以来、「住まいが変われば暮らしが変わる」という合い言葉を掲げて、住まいづくり事業を進めてきました。

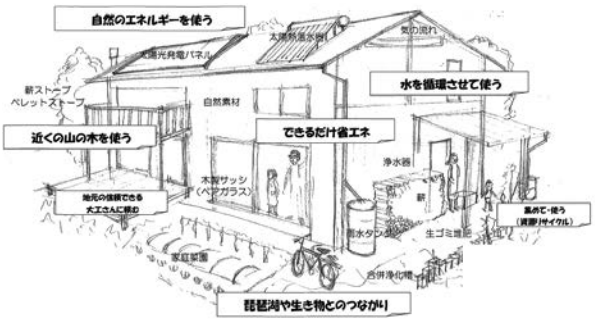


図-1　碧いびわ湖の住まいづくり事業の概要

鈴木さんのお話を聞いた人の多くが関心をよせたのが「雨水利用」でした。そこでまず、雨水の活用から取り組みを始めました。

まずは散水用の小型雨水タンクの設置から。次に、不要浄化槽を雨水貯留槽へ転用する工事、そしてトイレでの雨水利用へと。

ちょうどこの間に、東日本大震災が起き、全国的に環境と防災への意識が高まりました。また2011 年に大阪で開催された「雨水ネットワーク会議全国大会」に参画し、関西と全国の雨水関連団体の皆さんとのネットワークができたことで、事業に広まりと深まりが生まれました。

さらに、太陽熱利用、薪ストーブ、国産杉の木製二重サッシなどの設置の事業化を進め、少しずつ実績を重ねていきました。

そして2013 年に完成したのが、冒頭でご紹介した綾さんのお宅です。

無垢材と自然素材で建てられた家。駐車場の地下には32ｔの雨水貯留槽が設置されており、大屋根に降った雨はコレクターでろ過して集水され、貯留されます。これを浅井戸ポンプでくみ上げ、散水、トイレ、洗濯に使えます。屋根には太陽熱温水器を設置してガス給湯器に直結してあり、浴室、洗面、台所でお湯が出せるようにしました。薪ストーブと木製二重サッシも備えられ、ライフラインに頼りきらない、低炭素で省エネで、災害にも強い住宅ができました。

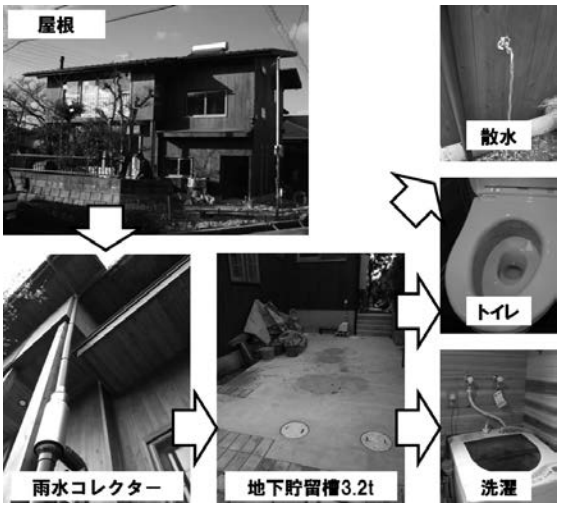


写真-4　綾家での雨水利用システム

ちなみにこの住宅は、2014 年には草津市主催の「くさつ・エコスタイルコンテスト家庭・個人部門」で大賞を、また、2015 年には滋賀県主催の「低炭素な『まちと建物』コンテスト」で優秀賞を受賞しました。

この綾さんの住まいづくりを通じて、その良さが明らかになったのが「雨水洗濯」です。もとより雨水は天然の軟水なので、せっけんの使用量も減らせて、せっけんカスもできにくい。とは聞いていましたが、まだ実感には至っていませんでした。

綾さんも最初は洗濯には使われていませんでしたが、改めてお薦めをしたところ、おそるおそる、使ってくださいました。すると、洗濯機から洗濯物を取り出し、干すときに「手触りが全く違う」ことに気づかれました。「さっぱり」していて、せっけんがきれいに流されている、と実感できてからは、洗濯を再優先して雨水を使われています。

こうして実感した雨水の良さと「身近な自然とつながる住まい」の良さを多くの方に伝えたい、との願いを込め、綾さんはオープンハウスを開催してくださっています。

オープンハウスはこれまでに10 回開催し、100 人以上がお訪ねになりました。雨水を積極的に活かした住まいづくりをしたいという人の

輪も広がり、太陽熱利用や地域材の利用も併せて、「身近な自然とつながる住まい」がひとつ、また一つと実現しています。

リフォームでの雨水洗濯　集合住宅での菜園用タンク

写真-5　さまざまな雨水活用の展開

5. 雨水活用が育む「希望の心」

綾さんをはじめとして、こうした住まいづくりを実践されたお母さんたちが、とても喜んでくださることがあります。

それは、子どもたちの感受性が磨かれる、ということです。雨が降ったら「雨がタンクに溜まるね」、晴れたら「今日はお日様のお風呂に入れるね」。そんなことを親子で話し合える。身近な自然への感謝と信頼を子どもたちがおのずと実感している。そのことが、お金には代えられない価値だ、と。

さらに雨水の活用は、個別の住宅にとどまらず、水源のない森の子育て広場（滋賀県栗東市の「たまてばやし」）で、小屋を建てて雨水タンクを設置することも行いました。

写真-6　野外子育て広場での雨水活用

また、滋賀県大津市の比叡平地区では、緑ゆたかで災害に強いまちづくりの一環として取り組まれた、地域ぐるみでの小型雨水タンクの一斉設置を担いました。

こうした雨水を活かす取り組みの広がりを通じて、私は、雨水はそれに関わる人の中に「希望の心」を芽生えさせる、と実感しています。

その理由はきっと、雨水活用の実践を通じて「今まで厄介者で汚いものだと思っていた雨が、こんなにきれいで役立つものだった！」という目からうろこの発見と、「それほど大きなお金や労力をかけずとも、自分にできることがある」という気づきがもたらされるからだと思います。

大規模なライフラインや経済システムに依存した暮らしの中で感じている、不安や不便さ、そして身近なものへの不信感や自分自身への無力感…。そこから脱することができるという「希望の心」が、雨水を活かすことで、実感できるようになるのだと思うのです。

振り返れば、せっけん運動もまた、悲鳴をあげているかのような琵琶湖を前にしながらも「自分たちにできることがある」との「希望の心」が広がったからこそ、あれだけ大きなうねりになったのではないかと思います。

私たちが「子どもと湖が笑ってる未来」を実現していくためには、取り組むべき課題がまだまだあります。

しかし、足元にあるものに目を向け、自分たちの力を信じ、身近な人とのつながりを大切に育んでいけば、きっと、その壁は乗り越えていけると思うのです。

NPO 碧いびわ湖ではこれからも、雨水の活用で得られた「希望の心」を胸に、自分たちの目指す暮らしの実現に取り組んでいきたいと思います。そして、その姿を身を持って示すことで、子どもたちに「未来への希望」を伝えていきたいと思います。